

大学生のボランティア意識とサービス・ラーニングの効果

— 桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の取り組みから —

松谷 満・青山 鉄兵・田村 和寿・木村 清一

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2010年2月26日 受理)

1. はじめに

近年、日本でもサービス・ラーニングを教育カリキュラムの一環として導入する大学が増えている。サービス・ラーニングとは、学校における学習と、社会（地域）における貢献活動を融合させた教育方法であり、学習にもとづいた社会貢献、活動経験にもとづいた学習の深化、という相互作用をねらいとするものである。

サービス・ラーニングは、1970年代以降、アメリカで積極的な導入がなされてきた⁽¹⁾。現在では約950の大学で取り組みがなされるまで普及し、その教育効果が注目を集めている。日本では2000年代半ばから、本格的な導入が開始された⁽²⁾。ボランティア活動や大学の地域連携が重視される現状もあり、大学教育の新たな方向性を示すものとして注目を集めている。昭和女子大学、国際基督教大学、関西国際大学など、文部科学省の支援を受けた教育プログラムが多いのもその証左といえよう。

2008年度に開設された桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部は、「文化スポーツ」という新機軸を打ち出しているが、その教育カリ

キュラムにおいて、サービス・ラーニングは重要な位置を占めている。これは、授業における「からだ」の学びを実践的な社会貢献活動に活かし、さらにその体験から得られたものを学習に活かす、というサイクルこそが「文化スポーツ」人の育成に有効な教育方法ではないか、との着想による。

先述のように、サービス・ラーニングは日本の大学でも普及しつつあるが、本学スポーツ健康政策学部のサービス・ラーニングは2つの際立った特徴を有する。第1に、体育・スポーツ系という学部の特徴があげられる。本学部は従来の体育・スポーツ系の学部とは一線を画す教育を目指しているわけだが、学生の多くは高校までスポーツ活動を熱心に行ってきた者、スポーツに強い関心を有する者がほとんどであり、その点では体育・スポーツ系の学部とひとまずは位置づけられる。これまで、そのような特徴を有する学部が主体となりサービス・ラーニングを行った例は少なくとも日本ではみられない。その意味で、体育・スポーツ系ならではのサービス・ラーニングの展開がなされるとの期待は大きい。

第2に、実施初年度から評価方法の確立を重要なテーマと位置づけた点である。サービ

Mitsuru Matsutani, Teppei Aoyama, Kazuhisa Tamura, Seiichi Kimura :
Faculty of Culture and Sport Policy, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane-cho, Aoba-ku, Yokohama,
225-8502

ス・ラーニングにおける評価の重要性はたびたび指摘される場所であるが、この点については先進的な各大学においても模索中の段階である。本学部では、(1) 成績評価、(2) 改善評価（教育プログラムの改善に向けた評価）、(3) 効果評価という3つの柱をたて、それぞれについて質的・量的双方を含めた評価方法の確立を目指して調査研究および議論を積み重ねている。

本稿は、本学部のサービス・ラーニングについて、効果評価にかかわる中間的な報告を行うものである。まず、「サービス・ラーニング実習」および調査研究の概要を紹介し(2節)、基礎的なデータとして学生のボランティア意識について概要を示す(3節)。そのうえで、効果評価に関する分析結果を報告したい(4節)。

2. 桐蔭横浜大学における「サービス・ラーニング実習」

2-1 実習の概要

本学部では、2008年度の開設当初から「サービス・ラーニング実習」にむけた準備を行ってきた。具体的には、教員からなるワーキング・チームを形成し、(1) 実習先の検討⁽³⁾、(2) 実習の具体的なスケジュール、諸手続きの検討、そして(3) 評価方法の検討を進めてきた。

2009年度には、本学初の「サービス・ラーニ

ング実習」が2年生を対象に実施された。まず、実習への参加を希望する学生は、社会貢献活動の今日的意義やボランティア活動の現状と課題等に関する講義(「社会貢献論」)を受講し、そのうえで実習先の選択を行った⁽⁴⁾。実習は7月から11月にかけて行われ、69名の学生が参加した。2009年度の実習先は表1にある13団体である。表からうかがえるとおり、体育・スポーツ系という本学部の特徴を十分に活かせるような諸団体の協力を得ることができた。

実習先において、学生は30～60時間の範囲で実習を行った。実習には、学生が受入先に定期的に通う「通所型」と現地に滞在して行う「宿泊型」とがあった。実習中、学生は実習日誌に活動記録を記入し「振り返り」にそなえた。また、教員が各実習先への巡回指導を行った。

実習終了後は「振り返り」の段階となる。学生は実習についてのレポートを提出後、教員の添削・指導を受け、レポートを再提出した。実習先からは各学生に関する振り返りシートの提出がなされた。そのうえで、実習先を含む関係者も出席した活動報告会を開催し、初年度の実践の成果を全体で共有する場をもった。以上が、これまでの概要である⁽⁵⁾。なお、2010年度は初年度の改善評価をふまえ、さらに規模を拡大しての実施が予定されている。

表1 サービス・ラーニングの実習先(2009年度)

| |
|--|
| 国立中央青少年交流の家 (財)横浜 YMCA (財)神奈川県青少年協会 NPO 法人びーのびーの (地域子育て支援) NPO 法人スマイルオブキッズ (難病の子どもと家族の支援) 横浜市青葉国際交流ラウンジ (地域の外国人支援) NPO 法人 ST スポット横浜 (演劇) 横浜市反町地域ケアプラザ (高齢者介護) NPO 法人昂の会 (精神障害者支援) NPO 法人日本ガーディアンエンジェルズ (地域安全活動) NPO 法人ビッグイシュー基金 (ホームレス支援) (社)企業メセナ協議会 (財)日本盲導犬協会 |
|--|

2-2 調査の概要

先述のように、本実習では評価方法の確立が重要なテーマとなっている。それゆえ、評価方法についてのワーキング・グループが組織され、調査方法をめぐって検討がなされてきた。そのなかで、初年度については(1)学生の実態を把握すべく基礎的な情報を収集する、(2)サービス・ラーニングの効果について探索的な調査を簡便な形で行う、という目標が設定された。

(1)については、既存のボランティアに関する調査を参考に、学生のボランティア活動とその意識について、質問紙調査を行うことになった。こうした実態の把握が、サービス・ラーニングの効果を高めるうえで重要と考えたためである。

(2)については、ボランティア学習やサービス・ラーニングにおける学習の効果および評価に関する文献を幅広く参照し⁽⁶⁾、効果がみとめられる、もしくは効果があると期待されるような心理的諸側面について、実習前後での変化を調査することになった。この調査は、今後より精緻な調査を企画するうえでの探索的調査という位置づけであった。

実際には(1)と(2)は併せて行われた。まず実習開始前の7月に、本学部2年生全員を対象に質問紙調査を実施し(事前調査)、実習を終えた学生に対し、その約1~2ヶ月後にほぼ同様の内容の調査を実施した(事後調査)。このように、比較対照群である実習不参加の学生については事前調査のみ、実習参加学生については事前調査と事後調査を行った。有効回答数は事前調査が231、事後調査が47である。

事前調査は以下の項目群からなる⁽⁷⁾。①これまでのボランティア活動について、②ボランティア活動に対する意識、③自己能力評価、④社会意識である。①②は日本学生支援機構が実施した「学生ボランティア活動に関する調査」を主に参照している⁽⁸⁾。他大学の学生とある程度比較可能な形で学生の活動と意識

の実態を把握することが意図されている。具体的には参加意欲の有無、参加する場合の問題点や不安などをたずねた。

③は関連文献において論及されていた Key Competency (OECD) や「社会人基礎力」(経済産業省)などをふまえて作成された項目群である。コミュニケーション能力や自律的に行動する能力などを測る項目が含まれている。サービス・ラーニングによって、これらの能力が向上するのではないか、というのが筆者らの仮説である。

④は社会や他者に対する意識をみる項目群である。これについては、心理学分野の測定尺度を参照した⁽⁹⁾。サービス・ラーニングによって、他者に対する信頼や援助への関心が強められるのではないか、というのが筆者らの仮説である⁽¹⁰⁾。

事後調査は主に③④のどの部分において、実習の前後で変化がみられるのかを検証するためのものである。事前調査のうち、ボランティア活動の経験、ボランティア活動に参加する場合の問題点を除いた計30項目をそのまま用いた⁽¹¹⁾。

以上が調査の概要である。次節以降で本調査の分析結果を示すことにしたい。3節では学生のボランティア経験および意識(①②)を、4節では実習前後での自己能力評価や社会意識の変化(③④)を取り上げる。

3. 大学生のボランティア意識

本節では、本学部学生のボランティア経験および意識の実態について集計結果を示す。随時、全国調査の結果を参照して本学部学生の特徴をさぐりたい。なお、実習参加学生と不参加学生とのあいだにはすべての項目で有意差が確認されなかった。したがって、ここでは全学生についての集計結果を示す。

3-1 ボランティア経験

ボランティア経験の有無については、83%が「経験あり」と回答した。全国調査⁽¹²⁾で

は約65%となっていることから、本学部学生のボランティア経験率はかなり高い。ただ、これが体育・スポーツ系という学部の特徴によるものなのか、全国調査が実施された2005年以降、ボランティア活動がより定着をみたのかは明らかでない。

内訳をみると、環境関連がもっとも多い。より具体的には地域での清掃活動などが多く含まれている。次いで、子ども関連、高齢者・障害者関連となる。この点については、全国調査とほぼ同様の結果といえる。(図1)

ボランティアの経験率は高いが、その活動に満足しているかとの質問に対しては、「満足している」が50%にとどまり、「どちらともいえない」が44.2%、「満足していない」が5.8%となった。全国調査では65%が「満足している」と回答しており、その違いは大きい⁽¹³⁾。本学部学生は、ボランティア経験はあるものの、その活動にはそれほど満足していないようである。

また、ボランティア活動のきっかけも全国調査の傾向とは異なる。全国調査では「自発的な意思」で活動を始めたとの回答がもっとも多く、次いで「サークルなど」が多くなっていた。一方、本学部学生については、学校活動、団体・サークルでの活動をきっかけとする者が多く、「自発的な意思」での活動は相対的に少なくなっている(図2)。全国調査が2～3年生を対象としており、現在の活動を中心にたずねているという違いはあるが、本学部学生のこれまでのボランティア経験の

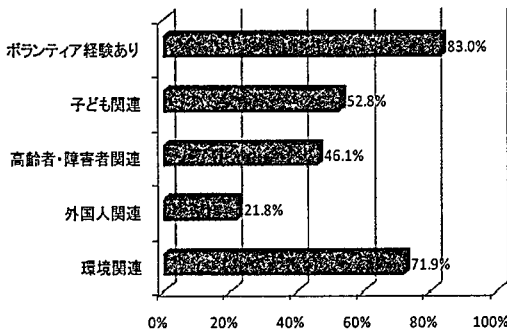


図1 ボランティア経験の有無とその内容

特徴は、ある程度明確になったのではないかと。要約するならば、ボランティアの経験はあるが、それは自主的な活動というよりむしろ、学校・団体の成員としての活動である場合が多く、活動自体にもあまり満足感を得られていない、というのが典型的な姿として浮かび上がってきたといえよう。

3-2 ボランティア活動への参加意欲

もちろん、先の結果は本学部学生に自主性が不足しているということの意味するものではない。むしろ、自主性を発揮する機会がこれまであまり与えられてこなかったというべきであろう。図3は、今後やってみたいボランティア活動についての回答結果である。いずれの分野に対しても、半数程度かそれ以上の学生が意欲を示しており、とりわけ子ども関連のボランティア活動は82.6%もの学生が希望している。ちなみに、18～24歳の若者を対象として2007年に実施された全国調査

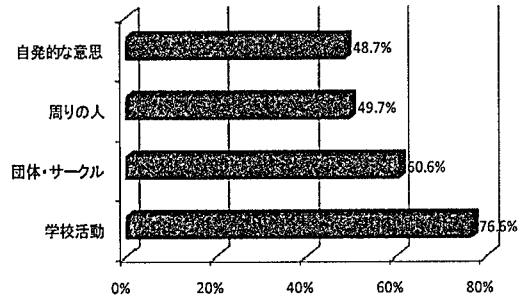


図2 ボランティア活動のきっかけ

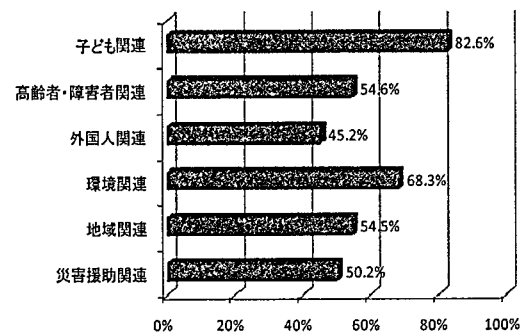


図3 今後やってみたいボランティア活動

では、ボランティア活動に興味があるとの回答は56.1%にすぎず⁽¹⁴⁾、本学部学生の意欲の強さが際立ったものであることがわかる。こうした強い参加意欲を十分に発揮できるような環境を整備することが大学には求められるだろう⁽¹⁵⁾。

3-3 ボランティア活動に参加する際の問題点や不安

大学が学生の活動を支援する際には、学生がどういった点に問題や不安を感じているのか、といったことをふまえて対策を練る必要がある。その意味で、以下に示す結果は、今後の活動支援において貴重な資料となろう。

まず、ボランティア活動をするうえでの問題としては、「大学の授業や部活動が忙しい」が78.7%と最も多く、「情報」「経費」「技術や知識」の不足もそれぞれ7割程度が障害となると回答している。一方、アルバイトは授業や部活動に比べると障害として認識され

る度合いはやや低い。

また、ボランティア活動をするうえでの不安としては、「役に立てるか」が64.3%でもっとも多い。次いで、「自分の時間がなくなってしまうか」「相手とうまく接することができるか」といった点に多くの学生が不安をもっているようである。

ちなみに、「忙しい」「自分の時間がとられる」といった点に問題や不安を感じている学生は、そうでない学生よりも過去のボランティア経験に関して満足度が低い。逆にいえば、ボランティア活動で満足感が得られた場合、他の活動との両立に関する問題や不安は一定程度解消されると推察される。(図4,5)

4. サービス・ラーニングの効果

4-1 事前調査における自己能力評価と社会意識

前節では、学生のボランティア経験と意識について調査結果を確認した。引き続き、自

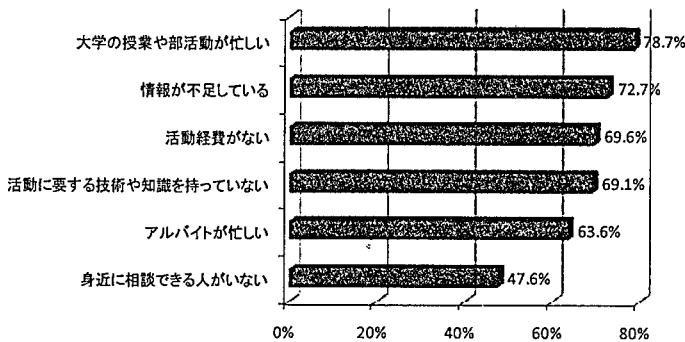


図4 ボランティア活動をするうえでの問題

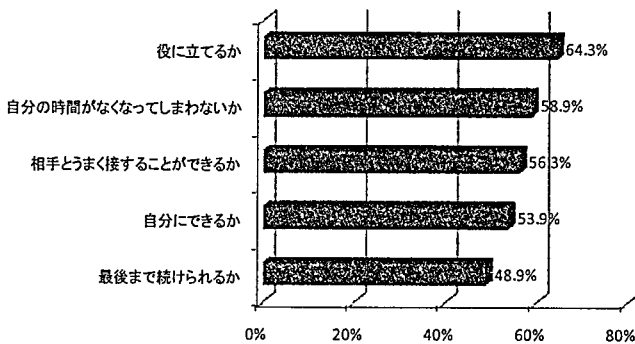


図5 ボランティア活動をするうえでの不安

己能力評価や社会意識がサービス・ラーニングによって変化したのかどうか検証を試みたい。まず、事前調査の結果を示しておく。ちなみに、心理的諸側面についての各項目でも、実習参加学生と不参加学生とのあいだに統計的な有意差は確認されなかった。

図6に自己能力評価の集計結果を示してい

る。4段階評価のうち、肯定的な回答の割合のみを色つきで表示している。すべての項目で肯定的な回答が6割を超えているが、なかでも高い割合となっているのは、「自分と違う世代の人と話すことができる」「目上の人に対する言葉遣いがしっかりできる」「周りに気をつかうこと・気配りができる」といっ

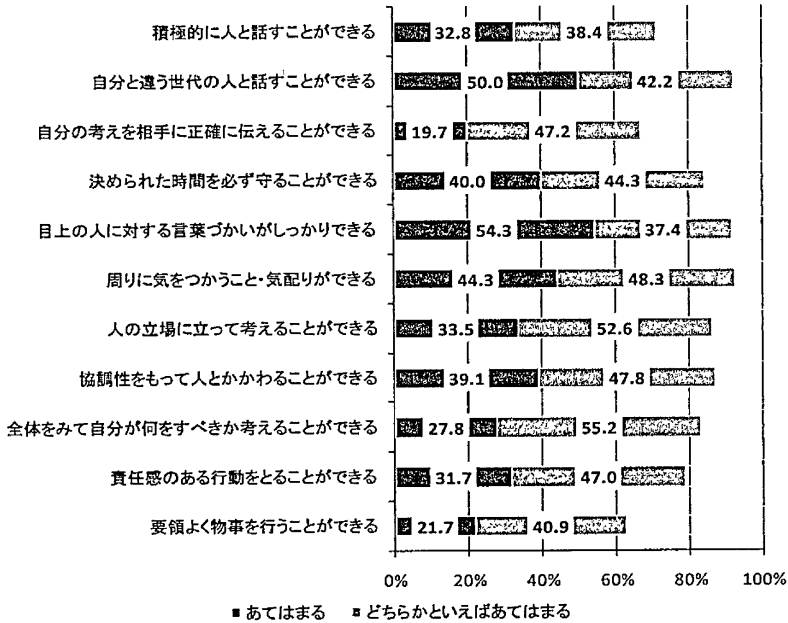


図6 自己能力評価

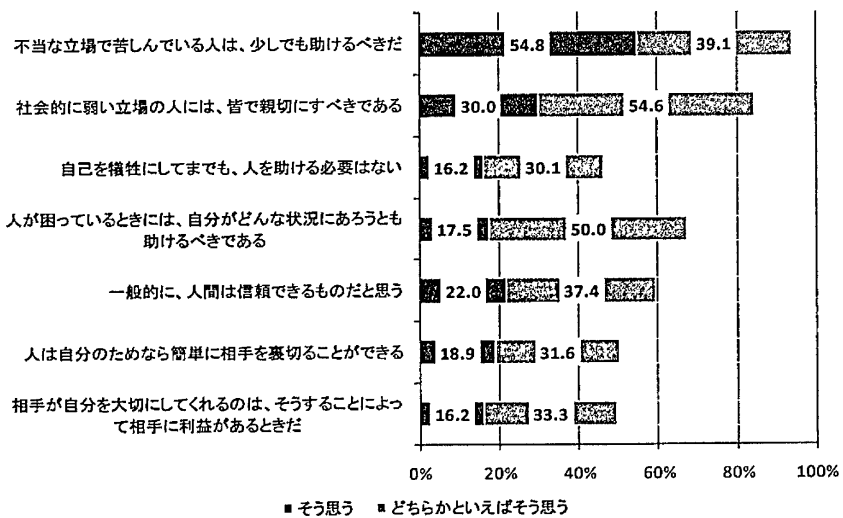


図7 社会意識

た項目であった。逆に、相対的に低い割合となっているのは、「自分の考えを相手に正確に伝えることができる」「要領よく物事を行うことができる」といった項目であった。

結果をあえて単純に整理するならば、本学部学生は規律性や協調性についてはある程度自信を持っているが、コミュニケーション・スキル、判断力、リーダーシップ能力についてはやや物足りないと考えているようである。

図7には社会意識の集計結果を示している。7つの項目のうち上の4つが援助規範意識、下の3つが信頼感にかかわるものである。図6と同様、肯定的な回答の割合のみを色つきで表示している。援助規範意識に関していえば、ほとんどの学生が他者を援助する必要性を認識している（「不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ」「社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである」）。ただ、「自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない」という項目に半数近くが肯定的な回答をしており、自分自身のコミットメントについてはそこまで積極的ではないようである。

一方、信頼感については6割程度が「一般的に、人間は信頼できる」と回答しているものの、「人は自分のためなら簡単に相手を裏

切る」「相手が自分を大切にしてくれるのは、相手に利益があるとき」といった項目には半数近くが肯定的な回答をしており、他者に対する信頼はあまり強いとはいいがたいことがわかった。

4-2 事後調査における変化

では、自己能力評価と社会意識は「サービス・ラーニング実習」を経て変化したのだろうか。先の17項目について、事前調査と事後調査の回答をもとにt検定を行った結果、6項目について統計的に有意差が確認された。表2に、変化がみられた項目についての結果を示す。

自己能力評価については4項目で有意差が確認された。いずれも平均値が高くなっており、これは事前調査よりも事後調査において自分自身に対する能力評価が低下していることを示すものである。サービス・ラーニングによって能力評価が向上するという本稿の仮説とはまったく逆の結果となった。

社会意識については2項目で有意差が確認された。「社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである」という項目で肯定的な回答が増え、「相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ」という項目で否定的な回答が増

表2 事後調査で変化がみられた項目

| | 事前調査 平均値(標準偏差) | 事後調査 平均値(標準偏差) | t 値 |
|--|-------------------|-------------------|-------------------|
| 積極的に人と話すことができる | 1.8 (0.9) | 2.0 (0.8) | -1.9 ⁺ |
| 自分と違う世代の人と話すことができる | 1.5 (0.5) | 1.7 (0.7) | -1.8 ⁺ |
| 人の立場に立って考えることができる | 1.7 (0.7) | 2.0 (0.6) | -2.3 [*] |
| 全体をみて自分が何をすべきか考えることができる | 1.9 (0.7) | 2.1 (0.6) | -1.8 ⁺ |
| 社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである | 2.0 (0.8) | 1.7 (0.7) | 1.8 ⁺ |
| 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ | 2.4 (0.9) | 2.8 (0.7) | -2.6 [*] |

N=47 * $p < 0.05$ + $p < 0.1$

注：1=「あてはまる」「そう思う」～4=「あてはまらない」「そう思わない」と数値化し、その平均を示している。

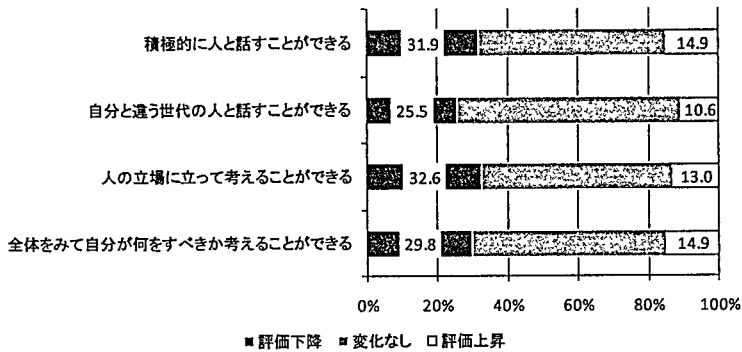


図8 事後調査における変化（自己能力評価）

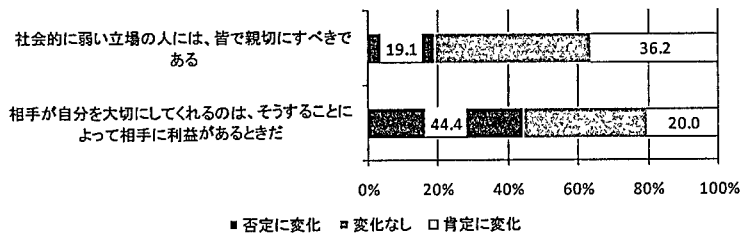


図9 事後調査における変化（社会意識）

えた。これは他者への信頼や援助への関心が強まるという仮説通りの結果である。

これらの結果を視覚化したのが図8および図9である。それぞれの項目について、回答が変化した者、変化しなかった者の割合を示した。自己能力評価については、2割台後半から3割程度の学生が評価を下げているのに対し、評価を上げている学生は1割台前半にとどまっている。社会意識については回答の変化がより多くなっている。社会的弱者への援助に肯定的となった者が36.2%、逆に否定的となった者が19.1%であった。また、利己的人間観を肯定するようになった者が20.0%、否定するようになった者が44.4%であった。

以上のように、いくつか興味深い変化がみられたわけだが、自己能力評価について仮説とは異なる結果となったことはどのように解釈できるだろうか。考えられるのは、以前の自己評価があまり根拠のない自信にもとづいたものであり、「サービス・ラーニング実習」への参加が自己能力の見直し、ひいては社会経験の不足への「気づき」という効果をもた

らしたのではないかと、との解釈である。ただ、今回の結果は既存の調査研究が想定してきた枠組からは逸脱するものであり、今後の調査も含めて慎重な検討を要するだろう。

一方、社会的弱者に対する援助の重要性への気づき、利己的人間観の否定という変化が生じたという点は既存の調査研究と同様の結果が得られたといえよう。本調査でとりわけ大きな変化がみられたのは利己的人間観に関する項目であった。さまざまな実習先における現場スタッフの真摯な活動を目の当たりにしたことが、学生に強い印象を与える結果となったのであろう。

5. まとめ

最後に、本稿の分析から得られた知見を簡単に整理し、今後の課題についていくつか述べたい。

本稿では、学生に対するアンケート調査の分析から、そのボランティア意識の実態とサービス・ラーニングの効果について検討を

行った。まず、本学部学生については、過去にボランティアの経験はあるが、それは必ずしも自主的（ボランティア）な活動とはいええず、満足度もそれほど高くないこと、その一方で、ボランティア活動への参加意欲は同世代の若者よりも強いことがわかった。すなわち、サービス・ラーニングなどの対外学習は学生のニーズにそったものであり、適切なプログラムが組まれればより効果的な教育がなしうる可能性は高いといえる。

また、学生の自己能力評価や社会意識については、(1) 規律性や協調性についてはある程度の自信を持っている、(2) コミュニケーション・スキル、判断力、リーダーシップ能力についてはやや物足りないと感じている、(3) 他者を援助する必要性は認識しているが、自分自身のコミットメントについてはそこまで積極的でない、(4) 利己的な人間観が約半数にみられる、といったことが事前調査から明らかになった。

そして、サービス・ラーニングの効果に関しては、自分自身に対する能力評価はむしろ低下する傾向がみられ、援助への関心や他者への信頼が強まるといった結果が得られた。前者の知見については、「気づき」の効果という肯定的な解釈を本稿では示したが、この解釈が妥当だとすれば、その「気づき」を自己の能力の向上につなげていくような効果的な教育プログラムが今後必要とされよう。また、後者の知見については、当初想定していた望ましい効果といえるものであり、こうした変化をより促すような方向でさらなる学習・経験が蓄積されていくようなプログラムの開発が望まれる。

本調査は、評価—改善というサイクルの重要性の認識にもとづいて行われたものであり、今回の知見はサービス・ラーニングおよび関連する教育プログラムの改善に活用されていくべきものである。そのサイクルをより効果的なものとすべく、今後とも継続的な調査を実施していきたい。「サービス・ラーニング実習」自体も次年度以降はさらに規模を

拡大していく予定であり、今回の知見の妥当性も再度の検証が可能であろう。また、効果測定のための新たな尺度の開発、実習先のタイプ別の効果測定など、よりさまざまな観点から評価の問題に取り組んでいきたい。本学部の「サービス・ラーニング実習」およびその評価の試みは、緒についたばかりではあるが、今後の発展の可能性に期待を大きくしている。

(謝辞)

初年度の「サービス・ラーニング実習」を無事終えることができたのは、実習先の検討や相談業務などご協力いただいたNPO法人アドバイザーネットワーク神奈川、NEC社会貢献室のスタッフ、そして実習先のスタッフ諸氏のご厚意と熱意によるものである。ご協力いただいた方々に、あらためて深く感謝申し上げたい。

(註)

-
- (1) 村上徹也「米国におけるサービスラーニング教育と社会貢献活動の融合」『ボランティアコーディネーター白書 2007-2009 年版』社会福祉法人大阪ボランティア協会、2008。
 - (2) もっとも、サービス・ラーニングと共通点の多い「ボランティア学習」については、1990年代後半から学校教育に導入されるようになり、調査研究もなされている（日本ボランティア学習協会『小・中・高等学校・大学におけるボランティア学習の評価のあり方についての調査研究報告書』、1999。日本ボランティア学習協会『学校教育におけるボランティア学習の評価に関する国内調査結果報告』文部省研究開発委嘱事業調査研究報告書、2000）。ただし、サービス・ラーニングは単に「ボランティア学習」の延長であるだけでなく、社会科教育・公民教育の観点からも注目を集めていることに留意されたい（倉本哲男「米国のサービスラーニングにおける市民教育論に関する研究—

- 『アブライド・ラーニング』および『人格教育』に関する実践分析を通して』『公民教育研究』11号、2003。唐木清志「サービス・ラーニングにおける『リフレクション』の理論と方法—『サービス・ラーニングにおけるリフレクションのための実践者ガイド』を事例として』『公民教育研究』12号、2004)。
- (3) 実習先の検討にあたっては、NPO 法人アドバイザーネットワーク神奈川、NEC 社会貢献室の協力を受けた。
- (4) 実習先選択の際の相談業務は、教員のほか NPO 法人アドバイザーネットワーク神奈川のアドバイザーが担当した。
- (5) 実習の概要およびその成果については、すでに学外でも報告を行っている(田村和寿・青山鉄兵「桐蔭横浜大学における『サービス・ラーニング実習』の概要」第12回全国ボランティア学習研究フォーラム、2009年11月22日)。
- (6) 林幸克『高校生のボランティア学習』学事出版、2007。伊藤篤「福祉教育・ボランティア学習における評価手法の基礎的検討—学習者の変容を中心とした量的データの分析に焦点を当てて』『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』12号、2007。松本潔「『サービス・ラーニング』の評価に関する一考察—『目標による管理』と融合の可能性』『ボランティア学習研究』4号、2003。齊藤ゆか「ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性』『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』12号、2007。齊藤ゆか「キャリア教育の一環としてのボランティア学習の意味を問う—サービス・ラーニング評価にむけて』『ボランティア学習研究』9号、2008。
- (7) 具体的な調査項目については文末資料を参照されたい。
- (8) 独立行政法人日本学生支援機構「『学生ボランティア活動に関する調査』報告書」、2006。(財)内外学生センター「『学生のボランティア活動に関する調査』現状と課題」、1998。
- (9) 具体的には、箱井・高木の援助規範意識尺度と天貝の信頼感尺度の一部を援用した(吉田富二雄編『人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」心理測定尺度集2』サイエンス社、2001)。
- (10) アメリカでは、サービス・ラーニングの効果について測定尺度の開発が盛んに行われている(Bringle, R.G., M.A. Phillips, and M. Hudson, *The Measure of Service Learning: Research Scales to Assess Student Experiences*, American Psychological Association, 2004)。こうした尺度も今後の調査で活用していきたい。
- (11) 具体的には事前調査の(1)～(10)、(18)～(23)が事後調査では省かれている。
- (12) とくに断りがない場合、2005年に日本学生支援機構が実施した全国調査をさす。
- (13) 全国調査は「現在のボランティア活動」のみについて満足度をたずねており、質問の違いが影響した可能性もある。
- (14) 『第8回世界青年調査報告書』内閣府政策統括官(共生社会政策担当)、2009。
- (15) 国内各大学の支援体制の現状については、齊藤ゆか・神谷明宏「高等教育におけるボランティアサポート体制の評価と支援方策」『聖徳大学研究紀要 人文学部』17号、2006を参照されたい。

<資料>ボランティア活動に関するアンケート（事前調査）

- (1) あなたは「ボランティア活動」をしたことがありますか
(ボランティア活動とは、「自主的」で「金銭を得ることを目的としない」活動のことです。)
(ボランティア団体に対する金銭・物品などの支援は「ボランティア活動」には含まれません。)
- (2) ～ (5) あなたは、以下のような「ボランティア活動」をしたことがありますか
- ・子供たちにスポーツ、レクリエーションなどの指導をする
(子供の遊び相手、スポーツやレクリエーションの指導、野外キャンプの指導など)
 - ・お年寄りや障害のある人などを助ける
(介護、通院の付き添いや外出の手伝い、移動介助など)
 - ・国際交流・協力、日本にいる外国人の世話をしたり、外国で援助活動をする
(留学生や外国人の相談相手、災害地への物資援助などの救助活動、募金活動など)
 - ・自然や環境を守る
(道路・公園の掃除などの環境整備、リサイクル活動など)
- (「ボランティア活動」をしたことがある人のみ、教えてください)
- (6) あなたは自分が行った「ボランティア活動」に満足していますか
1. 満足している 2. どちらともいえない 3. 満足していない
- (7) ～ (10) あなたが「ボランティア活動」をはじめたきっかけとして以下のものがあてはまるかどうかお答えください
- ・自分の自発的な意思
 - ・周りの人（家族・友人・知人など）にすすめられた
 - ・所属する団体・サークルで参加の機会があった
 - ・学校活動の一環として
- (11) あなたは大学在学中に、「ボランティア活動」をしたいと思いますか
- (12) ～ (17) あなたは今後、以下のような「ボランティア活動」をしたいと思いますか
- ・子供たちにスポーツ、レクリエーションなどの指導をする
(子供の遊び相手、スポーツやレクリエーションの指導、野外キャンプの指導など)
 - ・お年寄りや障害のある人などを助ける
(介護、通院の付き添いや外出の手伝い、移動介助など)
 - ・国際交流・協力、日本にいる外国人の世話をしたり、外国で援助活動をする
(留学生や外国人の相談相手、災害地への物資援助などの救助活動、募金活動など)
 - ・自然や環境を守る
(道路・公園の掃除などの環境整備、リサイクル活動など)
 - ・いきいきとした地域を作る
(町おこしの活動、消防・防犯・交通安全の活動など)
 - ・国内の災害地での援助活動をする
(災害地への物資援助などの救助活動、募金活動など)
- (18) ～ (23) あなたが今後、「ボランティア活動」をするとした場合、以下のことは障害になると思いますか
- ・大学の授業や部活動が忙しい
 - ・アルバイトが忙しい
 - ・情報が不足している

- ・活動に要する技術や知識を持っていない
- ・活動経費がない
- ・身近に相談できる人がいない

(24) ~ (28) あなたが今後、「ボランティア活動」をするとした場合、以下のことは心配になりますか

- ・自分にできるか
- ・相手とうまく接することができるか
- ・役に立てるか
- ・最後まで続けられるか
- ・自分の時間がなくなってしまうか

(29) ~ (39) 以下のことはあなたにとってどれくらいあてはまりますか (4 択)

- ・積極的に人と話すことができる
- ・自分と違う世代の人と話すことができる
- ・自分の考えを相手に正確に伝えることができる
- ・決められた時間を必ず守ることができる
- ・目上の人に対する言葉づかいがしっかりできる
- ・周りに気をつかうこと・気配りができる
- ・人の立場に立って考えることができる
- ・協調性をもって人とかかわることができる
- ・全体をみて自分が何をすべきか考えることができる
- ・責任感のある行動をとることができる
- ・要領よく物事を行うことができる

(40) ~ (46) 以下の意見について、あなたはどのように思いますか (4 択)

- ・不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ
- ・社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである
- ・自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない
- ・人が困っているときには、自分がどんな状況にあらうとも助けるべきである
- ・一般的に、人間は信頼できるものだと思う
- ・人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができる
- ・相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ